

『ビートン社の家政書』に関する研究

妹島 治彦

本研究は、1861年にS. O. ビートン社から出版された『ビートン社の家政書』に関して、それが、主にその初版出版時においてどのような意味を持ちえたのかを、出版者及び編集者であるビートン夫妻の人物像を明らかにすることや、伝統的家政書との比較、先行する料理書や料理書著者との比較などを通して考察し、その本質を明らかにしようとする試みである。

全7章のうち、序章では、初版に付された書名や、“edited by”という表記を確認したうえで、議論の前提として、イザベラ・メアリー・ビートン（以降イザベラという）は著者ではなく編集者あるとする立場を表明する。同様に書名に関しては、一般に知られている『ビートン夫人の家政読本』という呼称ではなく、初版出版時に立ち返れば『ビートン社の家政書』とすべきであることを表明する。また今後の議論に必要な基礎知識として、『ビートン社の家政書』の分冊出版から単行本出版にいたる経緯を、これまで示されてこなかった資料をもとに確認する。そして、先行研究などでその根拠を示さずに述べられてきた出版部数については、これまであまり顧みられることのなかったヴェルカーの記述をもとに、手元の資料との整合性を確認しつつ、できるだけ正確な発行部数を明らかにする。最後に、先行研究についてまとめ、論文全体の見取り図を示す。

第1章では、イザベラに関して、その出自、生い立ち、結婚から死に至るまでを、比較的詳細に確認する。イザベラは、メルルボーンで生まれたが、その後すぐに一家はミルク・ストリートに居を移した。一家は下層中産階級に属する商人の家庭であった。イザベラはそこで幼少期を過ごした。しかし、4歳のときに実父は他界し、そののち、母親はエプソム競馬場の支配人ヘンリー・ドーリングと再婚した。母の再婚により、裕福な中産階級の子女として育てられ、教育を受けた。二十歳のときに若手出版者のサミュエル・オーチャート・ビートン（以降サミュエルという）と結婚した。結婚後しばらくして、S. O. ビートン社が出版する *EDM* に記事を書きはじめ、やがて『ビートン社の家政書』を編集するにいたる。しかし、4人目の子どもを出産した後、産褥熱のため29歳の誕生日を待たずしてこの世を去った。イザベラは能力の高い女性であったが、年齢や経験を考慮すれば、料理書あるいは家政書を独力で作り上げることは難しく、編集者とはいいつつも、その陰で若手ではあったが、夫であり有能な出版者でもあったサミュエルの指導や助言が不可欠であったことは自明であり、したがって『ビートン社の家政書』の本質を明らかにするためには、サミュエルについても理解することが不可欠であることを指摘する。

第2章では、サミュエル・オーチャート・ビートンに関して、その出自、生い立ち、出版者としての初期の業績、とりわけ『アンクル・トムの小屋』出版にかかわる事項に関して比較的詳しく検証する。また、妻の死後についてもみていく。サミュエルは、ワトリング・ストリートで生まれたが、実家は、ミルク・ストリートでパブリック・ハウスを経営していた。祖父も父親も、パブリック・ハウスを経営す

る傍ら政治にも参加するなどしていた。幼い頃母親が他界し、祖母とともにハドリーで暮らした。ピルグリムス・ホール・アカデミーで学生時代を過ごした後、紙屋での見習い修行に入った。21歳で修行を終え、チャールズ・ヘンリー・クラークとともに出版の仕事に携わるようになる。その直後、C. H. クラーク社から、当時アメリカで評判になっていた『アンクル・トムの小屋』がイギリスで初めて出版された。『アンクル・トムの小屋』出版にサミュエルがどのようにかかわったのかということはこれまで明らかにされてこなかったが、サミュエルの初期の重要な業績として、当事者の発言や、社名変更の時期などから、サミュエルの果たした役割とともに、出版者として、そのごく初期にどのような成功体験を積み重ねたのかを明らかにする。

第3章では、『ビートン社の家政書』が近世ヨーロッパの伝統的家政書の系譜に位置づけられうるかを検証するため、まず「家政」ということばに対して現代人が持つイメージを明らかにし、そのうえで伝統的な家政書において「家政」がどのような概念であったのかについて明らかにする。さらに、『ビートン社の家政書』出版時期は、工業化以前の伝統的な家政書が解体し、忘れ去られようとしている時期と重なり、農業を基盤とした「全き家」を、工業化と個人主義の影響下に成立した近代的小家族と比して理想のものとして憧憬するような著作が現れていたことを指摘する。以上を踏まえたうえで、伝統的な家政書解体後に、カスバート・ウィリアム・ジョンソンが著した出版物を手がかりに、どちらも伝統的な家政書の系譜に位置づけられるものではなく、カスバートのものは農書として、『ビートン社の家政書』は料理書として、それぞれの系譜に位置づけられるものであることを明らかにする。さらに、『ビートン社の家政書』は『ビートン社の愛玩動物の書』『ビートン社の園芸書』と合わせることによって、形式的には伝統的な家政書の扱う範囲を網羅していることを指摘し、その口絵に描かれた情景も、それに付合するように「古きよき」イギリスの農村風景を想起させるものになっていることを指摘する。

第4章では、これまで、単に料理書の著者であり、一風変わった人物であると見なされてきただけのドクター・ウィリアム・キッチナーについて、これまで見過ごされてきた資料により、真の姿を明らかにし、また、その料理書で示された「合理的美食」が意味するものについての見解を示す。その過程で、特にジョゼフ・バンクスの関係に注目し、ドクター・キッチナーが王立協会の会員に選ばれていたという事実を明らかにする。父親は地方からロンドンに出てきた労働者であったが、一代で財をなした人物であり、治安判事を務めるなどしていた。したがって、ドクター・キッチナーは、裕福でリスペクtableな中産階級の家庭に生まれたといえる。さらに、父親から相続した不動産によって不労所得を得ていた事実も明らかにした。ドクター・キッチナーが学歴を偽っていたことについて考察し、その学歴の有無が、ジェントルマンとみなされるか否かの重要な要件であり、その意味で、ドクター・キッチナーがジェントルマンであることに強い執着を示していたことの表れであったことを明らかにする。彼が主催した座談会や美食委員会での重要な規範は時間厳守することであった。それは合理的娯楽の趣旨とも一致し、料理書の序文で示された「合理的美食」の価値観の一部とも見なされる。「美食」あるいは「会食」という行為を娯楽ととらえ、中産階級を健全な方向へ向かわせる手段として「合理的美食」を発明したことは、それまでになかった新たな美食文化の創造であった可能性を示す。

第5章では、イライザ・アクトンの人物像を明らかにし、ミセス・ランデルの料理書との比較をと

して『最新料理法』の特徴を明らかにする。イライザ・アクトンが生まれ育ったのは、祖父も父親もジェントルマン意識の高い家庭であった。したがって、イライザもレディとしての意識が高く、経済的に苦しいときもあったが、その規範を逸脱することはなかったことを指摘する。イライザが志したものは詩人であったが、当時の出版状況から料理書の著者となったのであり、そのため料理書にも文学者としての意識を見いだすことができることを指摘する。さらに、文学者としての意識から、著作権に対する意識も高く、そのことが改訂版の料理書における「著者のレシピ」という記述に現れていることを考察する。また、料理書の利用者を「学習者」と表現するなど教育者としての一面も現れていることを指摘する。過去の料理書との比較から、必ずしも食材の分量を示すことがイライザの独自性とはいえないことを検証し、食材とその分量を別に項目をたててレシピの最後に示したことは、イライザの料理書の特徴付けるものであったことを指摘する。

終章では、『ビートン社の家政書』『ビートン社の愛玩動物の書』『ビートン社の園芸書』がきわめて関連性の高い出版物として出版されたことを、これまで指摘されることのなかった資料を用いて確認し断定する。また、そのことを含め、イザベラを著者ではなく編集者として明記した S. O. ビートン社の趣旨を考察し、明らかにする。さらに、書名に“Mrs.”を付した契機を明らかにし、その意味するところを考察によって示す。そして、同書が、その内容については特に目新しいものはなく、ほとんどが先行料理書などからの引用であることを示し、むしろその編集にこそ同書の特徴があることを明らかにする。

そして、『ビートン社の家政書』の本質を次のように結論づける。『ビートン社の家政書』とは、ちまたに散在するリスペクタブルな中産階級のスタンダードをかき集め 1 冊にまとめ上げた事典であった。広範かつ大量の情報と、その情報に対するアクセスの良さは、当時の同類他書に類をみないほど、その辞典的価値が高められていた。さらに、その魅力を高めたのは、古きよきイギリスの記憶をたぐり寄せてくるようなイメージ作りであった。実用的な内容と相まって、工業化以来、新しいものに辟易としていた当時の人びとにはむしろ新鮮であった。かくして、同書は同類他書に類を見ない発行部数を記録したのである。そして発行部数が多くなれば多くなるほど、今度は、そこに記されたことこそがスタンダードとして、影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。『ビートン社の家政書』には著者が存在しない。そのことが意味するのは、『ビートン社の家政書』の真の作り手がイギリスの中産階級そのものであったことである。さらに、その利用者もまた中産階級の人びとであった。その意味で、同書はまさしく、中産階級を明文化し、体現した書であったということができよう。そして、『ビートン社の家政書』に書かれていることを実践して得られるのは、EDMの創刊号の巻頭言で述べられた“Home Happy”にはかならない。言い換えると『ビートン社の家政書』において提示されたのは、ごく普通のリスペクタブルな中産階級であるための「幸せのかたち」であったということもできるのではないだろうか。